
仮面ライダーツヴァイ

Another

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーツヴァイ

【Nコード】

N2962J

【作者名】

Another

【あらすじ】

常に雪降る都市、雪都には仮面のヒーローが日夜誰かを……雪都を泣かせるもの達から皆の笑顔を護っていた。

この物語は『みなみけ』のキャラしか基本出ません、Wも今の所は登場しません！

ユカイドとリンクしてますが読まないで平気の……… 箸！

最後に過度な期待はせずに台本書きに注意して読んでください………
バカ野郎！！

（十一話から台本ではありません）

第一話 Sな二人／始動（前書き）

作者です、このツヴァイは
ユカイドの為に書きました

察して下さい

第一話 Sな二人／始動

常に雪降る都市・雪都

俺は一応探偵なんて職業をやつてる…まあ退屈だけはない仕事だ―危険と隣り合わせなのが…あれだけど

寂れた一軒家にモノクロ色のバイクを停めた彼は体を縮こませながら中に入る

ゴチャゴチャと本や雑貨…レポート用紙等が散乱した部屋を進み立派なデスクに腰を落とした彼はシツクなハットを脱ぎながら配達物を流し見て…一通の封筒に目を止めた彼は―硬直した

「おいおい！？マジかよ、」

「どうしたんだ？冬馬、」

ホイップクリームみたいな髪型の少女が奥から出てきて彼に尋ねる

冬馬

「いや…千夏…
督促状です、」

千夏

「……私の耳は正常か？
督促状と聴こえたが…」

冬馬

「正常ですね！
ち千夏ちゃん」

ああそうかそうか良かった

千夏

「ーッて、バカ野郎!!」

熊のぬいぐるみを冬馬に

ブン投げた千夏

冬馬

「ゴメン…」

シユンと落ち込む冬馬くん
因みに彼・冬馬は女の子だ
ボーイッシュな出で立ちで
小学生みたいだが二十歳だ

千夏

「ハア…何か依頼は？」

冬馬

「おッコレは？」

千夏

「何々…」

「最近雪都で起きる竜巻は私の彼が起こしているの…昔の彼ならこんな事は絶対にしない…探偵さん助けて下さい」

冬馬・千夏

「ドーパントか…」

「人間には不可能…そして自然現象だと不自然…二人の出番だな、」

粉々に砕けたビルだった物
を見下ろし彼はケータイを
取り出し誰かに電話をする

冬馬

「は、はい」 冬馬です」
藤岡さん…事件ですか？
でデ…ならうれ…」

藤岡

「事件だよ！最後がよく
聴こえないよ、冬馬」

冬馬

「あ…大した事じゃ
ないです、」

藤岡

「恐らくは風タイプの
ドーパントだね、」

千夏

「電話代わった、藤岡」
私は頑張るぞ」

藤岡

「うん、千夏ちゃん…冬馬
無茶しちゃダメだよ！」

冬馬・千夏

「〃〃はいッ〃〃」

千夏

「急げ！奴は次にホワイトツリーを破壊する気だ」

私は藤岡さんの為いや愛する雪都の為に愛車フェンリル／スノーを一路ホワイトツリーと呼ばれるビルへと走らせる…何故そこが狙われるか―私には難し過ぎる

後ろに乗せた千夏は、星のライブラリーへとダイブする事ができ…そこは全ての知識と可能性を納めた

図書館らしい

さて…雪都を

泣かせる奴は俺達

ツヴァイが相手してやる！！

第一話 Sな二人／始動（後書き）

作者です、如何でしたか？

楽しんで頂けたのなら

幸いです

第二話 Sな二人ノツヴァイ（前書き）

作者です、この物語は
ユカイドの為に書きました

察して下さい

第二話 Sな二人ノツヴァイ

仮面ライダーツヴァイ

俺達を劈く様な冷たい風…
雪都が泣いている…千夏が
私の腰を…強く抱き締める

冬馬

「千夏、安心しろ！俺が
ブッ倒してやるから！！」

しかし千夏は俯いたままだ

千夏

「私達だ、
バカ野郎！！」

決意の声を後ろに聞き愛車
の速度を上げていく冬馬…

ホワイトツリー

寒空の下、恋人達が寄り添い
ホワイトツリーを見上げて
愛を語り合う光景を憎々
し気に見詰める男が一人…

《TWISTDR》

USBメモリに酷似したガイ
アメモリを首筋に押し付け
螺旋を纏った怪人になる

ツイスター

「…絶望を教えてやる!!」

ズンズンとホワイトツリー
に向かうドーパントに気付
いた恋人達は悲鳴をあげて

逃げ惑う

ツイスター

「願いの数だけ輝く木だと
ふざけるなよ!!!!!!」

右手を翳すとクルクルと螺
旋が回転を始める

「はいはい！
ちよっぴ待った！！！！」

振り向くと両手を上に振る
冬馬と千夏の二人が―

ツイスター

「誰だ！？貴様は！！」

冬馬

「雪都を泣かす
奴はデメエだな？」

千夏

「貴方が破壊した物は全て
恋人達のデートスポット
フラれたか？バカ野郎」

ドーパントに向かって歩く
二人は腰にベルトを巻いて
ガイアメモリを千夏は右に
冬馬は左に持ち起動させる

《IF》

《MAYBE》

バックルに差し込むと空い

た差し込み口に相手のメモ
リが現れ二つを左右に展開

《IF MAYBE?》

二人を包む吹雪が晴れると
右半身が白銀、左半身が黒
金の二人で仮面ライダー、
ツヴァイが一步ずつ右足で
地面を踏むと冷気が溢れ左
足が熱気で地を溶かしなが
らドーパントに歩を進める

ツヴァイ

「さて… テメエの
懺悔を聞いてやる!!」

ツイスター

「メモリ二つで変身!?
聞いてないぞ!!」

見た目では分からないが声
で判断すると驚愕している
ツイスタードーパント

ツヴァイ

「俺達は特別だからな」

ビシッとドーパントを指す

ツイスター

「そうかい、死ねよ？」

先程同様に手をツヴァイに
翳し螺旋が回転しだす

ツヴァイ（千夏）

「あれは不味いー冬馬！！」

パチパチと右目が点滅した
瞬間！！全てを切り裂かんと
する風がツヴァイを襲った

無残にズタズタにされた地面……
ツヴァイが見当たらず
ドーパントは勝ち誇った笑
みを浮かべている筈だった

ツイスター

「……？……何時だ……！！」

背後に立つツヴァイに慌て
て距離を置く

ツヴァイ

「もし…恐らくは…と言う
可能性の力さ…！」

ツヴァイ（千夏）

「冬馬…！」

メモリブレイクだ…！」

MAYBEメモリを再度、
バックルに差し込む

《MAYBE

MAXIMUM

DRIVE》

ツヴァイが二人になったか
の様に半身が別れてドーパ
ントを囲み跳び蹴りを放つ

ツヴァイ・（千夏）

「メイビー……ツヴァイ…！！…！！」

一人ダブルライダーキック

を受けたドーパントは爆散
ガイアメモリが砕けてその
場に男が昏倒する

冬馬

「フ…決まった””」

変身を解きハットを被り
直してCoolに佇む冬馬と

千夏

「今度、藤岡と最上階で
ディナーを楽しもう!!」

相棒を差し置いて口許が
緩んじやう千夏ちゃん

白き超高層ビル・ホワイト
ツリーが二人を照らしその
影は重なり合っていた

遠くから赤い光が二人の下
へ走ってきてパトカーから
降りた藤岡が冬馬と千夏を
抱き締め、下っ端の警官達

が男をあつという間に連行

藤岡

「怪我は、大丈夫？」

千夏

「ふ藤岡！？」

「暑苦しいぞ」

冬馬

「藤岡ちゃん」

蕩けていく二人を連れて
藤岡さんは！！ホワイト
ツリーへと入っていった

第二話 Sな二人／ツヴァイ（後書き）

作者です、如何でしたか？

藤岡：モテモテだね～

（原作もただどね）

楽しんで頂けたのなら

幸いです

第三話 Sな家族／雪都の噂（前書き）

作者です、このツヴァイは
ユカイドの為に書きました

察して下さい

第三話 Sな家族／雪都の噂

仮面ライダーツヴァイ

「ああム力つく役立たず」

クワガタみたいなツインテールの娘が長い廊下を闊歩

「あら、夏奈？不機嫌ね」

夏奈

「当然だ、春香！！」

どうやらツヴァイを捕まえる為にメモリを売り依頼状まで書いたのに呆気なく倒された男に腹を立てている

春香

「それは残念ね…」

この人がお姉さんなら幸福だろうなを体現した春香が扉を開けて夏奈が先に部屋に入っていく

「やあ春香、夏奈！今日も一段と可愛く綺麗だね」

長い長いな！？と二回言いそうなテーブルの奥にいい人そうなおじさんが手を二人に振って微笑んでいた

春香・夏奈

「ご機嫌よう

タケルおじ様！！」

軽くお辞儀をしてテーブルに着いた二人の目の前に溜息が出そうな豪華な朝食が

並ぶ

タケル

「それじゃー

みんな

「頂きます！！」

夏奈

「聞いて下さい、おじ様」

タケル

「おや、ツヴァイが…」

春香

「私達の妹は何処に…」

徐にメモリを取り

出したタケル

タケル

「安心しなさい必ず

千秋は見つかるよ!-!」

《TROUBLE》

春香

「そつよね!!夏奈」

《SPRING》

夏奈

「タケル”春香”」

私は… 幸せだあ””
”

《SUMMER》

三人は異形なる者

ドーパントに変身した

所変わって保坂探偵事務所

千夏

「冬馬！？知ってるか？

洋梨と言つものを！！！！」

事務所内を甘くフルーティ
な香りが充満している

冬馬

「それは俺が
用無しだと？」

それを聞いた千夏は…

千夏

「洋梨…用無し…冬馬…！」

冬馬

「ヒツ！？―なに？」

千夏

「実に興味深い！！！！！！
君は天才だ！！！！！！」

早速洋梨と用無しの関係性
を検索しなければな冬馬！！
邪魔するなよと言いつつ
奥の扉の中へ消えていった

冬馬

「ハア…千夏の検索が
無けりや督促状は、
来ないんだけどな…」

『みんな〜!!』

おはこんばんにちは””

南夏奈のバカ野郎は〜

世界遺産ツツ!!!!!!

始まッたよー!!!!!!』

部屋のラジオから聞こえてきた夏奈の声に耳を傾ける

『夏奈さん、夏奈さん!!』

聞いて下さい!!!!!!

ーはい!聞いてますよ〜

実は楽園は実在します!!

またこのネタですか〜』

冬馬

「楽園か…藤岡さんとなら行きたいなあ””」

『あとあと”灰色の

カーテン見ちゃいました

怖いい!!!!!!…

ほんと怖いですね〜!!』

『仮面のヒーローに楽園!

灰色のカーテン…雪都は

話題に事欠きません!!」

冬馬

「仮面のヒーローで
俺達ツヴァイ？」

♪絶対J u m p 限界P u n c h
絶対J u m p 限界K i c k
♪

ケータイを取り出してピッ

冬馬

「ひゃい！？藤岡ちゃん」

藤岡

「冬馬？事件だよ!!」

どうやら、また愛する雪都
を泣かす奴が居るらしい!!

さて…

テメエの懺悔を

俺達が

聞いてやる!!!!!!

第三話 Sな家族／雪都の噂（後書き）

作者です、如何でしたか？

楽しんで頂けたのなら

幸いです

第四話 Dな奴／彼は乙女（前書き）

この物語・ツヴァイは
ユカイドの為に書きました

察して下さい

第四話 Dな奴／彼は乙女

仮面ライダー ツヴァイ

ああ幸せだ！仕事だけでも
藤岡ちゃんと一緒に居られ
るなんて夢みたい…千夏
には悪いけど検索に夢中な
貴女がバカ野郎なのだよ！！

藤岡

「あー冬馬？その近いよ！？
距離が…むーが””」

冬馬

「え？なんですか、
最後が聞こえませんかよ」

二人は現在、バスに乗って
地上の楽園なる物を探して
いるが冬馬は藤岡の腕に抱
き着いている…羨ましい！！

その頃、保坂探偵事務所の

千夏ちゃんは未だに検索中

千夏

「ふむ美味しい（＾＾）」

ああ太りますよ千夏ちゃん

千夏

「余計なお世話だ！！名前を間違えてたくせに！！」

ツグ！？―スンマセン…ッてそれは作者でしょう！！

千夏

「貴様も同罪だ！！」

このバカ野郎！！！！」

はい…猛省しますです

千夏

「パクッ…」そうだ！！ジャムも作ろうか！！」

洋梨のタルトの次はジャム
順番が逆じゃねえか？

千夏

「ふんふふ…ふふん」

鼻歌なんか歌うのは構わないが冬馬と藤岡はどつたる

一方冬馬と藤岡しゅんは！？

冬馬

「あッ！？藤岡しゅん」
ダメッ「いやッうア」

藤岡

「冬馬ッ！！俺……
ずっと君の事が――」

ガッと冬馬の肩を掴む藤岡しゅん！？ま、まさかだよな

藤岡

「君の事がずっと――」

冬馬

「……心の準備があ……」

「冬馬？おーい！！
起きろー！！！！」

冬馬

「はッハイー生起き…て
あれ？そこはーあれ」

ホワンホワンホワワァン

ハーイ！！夢オチだい

藤岡

「ん？冬馬、よく寝てたね
到着したみたいだよ！！」

私…かなりイタい！？はッ！？
よだれが…クールな私の
イメージがあ…

冬馬

「そつみたいですね…はは
行きましよう藤岡さん」

バスから降りた二人の前に
煌びやかな扉が視界一杯に
広がり…冬馬と藤岡を歓迎

する様に徐々に開いていく

青い海と空！！白い砂浜！！！！！！

パラソルに！！トロピカルな

“ジュースと藤岡ちゃん”

ああ私は今死んでも良い

藤岡

「不味いな…、」

冬馬

「え！？そ、そんな…」

ガクツと砂浜に膝を着き
顔が青ざめる冬馬くん…

藤岡

「冬馬！！これは人が望む
世界を見せるみたいだ」

COOLに状況を分析する藤岡
ちゃんと…ダメダメな冬馬

冬馬

「じ、じゃあ…」

藤岡

「幻惑タイプの

ドーパントだ!!」

青い海と空、砂浜も掻き消え…汚い路地裏に変わった

『冬馬…なにしてんだ？

バカ野郎!!!!!!』

ツヴァイドライバーを通し
千夏の声が頭に直接届いた

冬馬

「かゝなりツム力つく」

バシバシと服の埃を払って
立ち上がった冬馬

「楽しんで頂けたかな？
雪都のヒーローさん」

所変わって―南家

次女、南夏奈が上機嫌で庭をスキップしているのを長女、春香が微笑ましそうに眺めている…

春香

「どうしたの？夏奈、」

夏奈

「フフン、よくぞ！！
聞いてくれたな！！！」

ニヤリと笑うと領収証の
コピーを見せる夏奈

春香

「まあ？高額メモリが売れたの！？おめでとう」

パチパチ拍手する春香

夏奈

「ついでにツヴァイを
殺してくれればな」

春香

「高望みは、だゝめ」

夏奈の鼻先をチョンと叩く

春香・夏奈

「ふふふ…アハハハハ」

三階のテラスから二人を
優しく見守るタケル

タケル

「千秋…待っていなさい」

《BITE》

《AGITO》

第四話 Dな奴／彼は乙女（後書き）

作者です、如何でしたか？
楽しんで頂けたのなら

幸いです

早過ぎるかもしれませんが
次回はハーフチェンジです

原作は一話でいきなり
金に変わったよね

まあ売りと言われたら
それまでなんですけど

第五話 Dな奴／彼はお怒り！！（前書き）

この物語・ツヴァイは

ユカイドの為に書きました

察して下さい

第五話 Dな奴／彼はお怒り！！

仮面ライダーツヴァイ

「楽しんで頂けたかな？
雪都のヒーローさん」

そもそも俺が藤岡さんと一緒に楽園を探す羽目になったのは…そうあれは何時ものように雪都を愛車で流していた時、道端にこちらへ手を振る人影を見つけ華麗に横付けCOOLにヘルメットを外し二人に挨拶した

「こんにちは！
今日もいい雪ですね」

「ああ〃冬馬さん、
いい雪…〃〃」

二人の高校生から雪都特有の挨拶が返ってきたーうん確かに今日は素晴らしい雪だな…ふわっとしてて暖かいしね〃〃千夏は雪が暖

かい？私には理解できない
冬馬…私は変か？と落ち込
んでたな、かまくらでも作
ってやるかな？おお良い考
えだ！！喜ぶぞ”

おい！！冬馬、二人を
忘れてるぞー！！

「…帰ろうか？寒いし
冬馬さんは相変わらず
アレだしさ、」

「そ”そんな…悪いよ”」

活発そうな娘をもじもじと
してる娘が消え入る声で呼
び止める…結婚してくれ！！

マキ

「そう言えば！！！！！！」

アツコ

「！？ひいやあ！！！！！！」

急にバツと両手を広げた活
発娘・マキにもじもじ娘・
アツコは動悸を落ち着かせ

るのに必死だ…結婚して！！

マキ

「冬馬さんは知ってる？
楽園の噂をさ！！」

冬馬

「——へ？ああ、南夏奈の
ラジオで聴いた記憶が」

漸く現実に戻ってきた冬馬

アツコ

「〃私達の学校でも何人か
楽園に行ってきたって、
言う人が居るんだよ〃」

一生懸命に話してふう〃と
息を吐くアツコ…結婚…〃

冬馬

「—で、楽園に問題でも
あるのかな？」

顔を見合わせる二人

マキ・アツコ

「じ、実は—」

保坂探偵事務所

千夏

「なるほど…夢の様な時を
過ごした者達は現実には堪
えられなくなり…無気力
更には不登校か…」

『湖と沼の違い』と書かれ
た本をパタと閉じて口許に
手を当てて思案する千夏と
タイプライターに挑戦した
もののお手上げだと言わん
ばかりにハットを顔に被せ
て唸る冬馬くん…ぷくーッ

千夏

「さて…早速、

検索を始めようか」

熊のぬいぐるみを持ったま

ま静止…星のライブラリー
にダイブ！！真っ白な空間に
本棚が重力等を見殺しして所
狭しと並べられている

千夏

「検索すべきは楽園！！」

キーワードに含まれない棚
が次々消えていくが大して
変わらず狭苦しい

冬馬

「追加ワードは、雪都…
噂…ええとーちよつと
待ってくれ千夏、」

カチカチとラジオを調節！！

『南夏奈のツ！！！！！！
バカ野郎は希少価値いい
始まるよー！！！！』

『夏奈さん夏奈さん！！！！！！
聞いてください！！！！！！
はい〃夏奈はちゃんと！
聞いてますよー！！！！！！』

『楽園への行き方が僕！
解っちゃいました！！！！
わわ！？ホントに？凄い！！
カレーの精さん！楽園は
何処なの～～！？！？』

『雪都の路線バスの内の
どれかが楽園へと走って
るそうです、実を言うと
僕の知り合いがソレで楽
園に行ってきたんだそう
です！？―まさか路線バス
で楽園に行けるなんて！？
夏奈…ビックリ！！！！』

冬馬

「聴こえた？千夏」

千夏

「……………検索完了だ！
そのバスは……………」

♪絶対Jump 限界Punch

絶対Jump 限界Kick
♪

ちょっと待ってとピツと
ケータイを押した冬馬

藤岡

「冬馬？頼みたい事があるんだけど、」

冬馬

「はひッ藤岡しゃん」

なんでも任せて下さい」

わ私は…ふじ」雪都を

愛してますから」」

簡単に説明すると警察方も楽園を調べていたらしいが大した情報が得られず藤岡さんはドーパント絡みの件だと踏み…私ーいや、私達なら何かしらの情報が掴めるかもと電話したみたい…
タイミングばっちり！！藤岡しゃん」早速千夏の検索結果を聞いて私と藤岡しゃんはあるバス停で待ち合わせて路線バスに乗り込んだ

そんなこんなで冒頭に戻る

冬馬達の目の前に絵の具を
ぶち撒けられた感じの怪人
ドーパントが嫌らしく嗤い
ながらクネクネしてる

藤岡はドーパントが相手で
は自分が足手まといだと理
解しているのでドライバー
を装着した冬馬と事務所に
居る千夏に奴を任せて邪魔
にならないようその場から
離れて本部に連絡を入れる

《IF》

《MAYBE》

冬馬

「最初に言っておく！！俺は
かゝなりッお怒りだ！！
ドーパント！！！！！！」

《 I F M A Y B E 》

ツヴァイ

「さて… テメエの懺悔を！！
俺達が聞いてやる！！」

ツヴァイが格好良く変身し
ビシッとドーパントを指差
したが… 気がつくと冬馬は
見知らぬ部屋のベッドの中
に居た！？ 彼女がふと横を見
ると藤岡しゃんが優しく髪
を梳かし微笑んで抱き寄せ

藤岡

「もう一度、いいかな？」

冬馬

「へ… は… っ… な… ！？」

恐る恐る視線を自分の身体
に向けた冬馬は―裸だった

うそ！？ 嘘！？ 覚えてない！？

藤岡しゃんと藤岡しゃんと
私のヴァージンが… ああ

「おいッバカ野郎！！！！」

ガンッ

ツヴァイ

「痛い！？何すんだ！——あれ
あれれ？…まさか？」

ドーパント

「ハハハッばーか！！！！」

クネクネうねうねと揺れな
がら腹？を抱えてツヴァイ
を指差して大笑い

ツヴァイ（千夏）

「ふむ、幻覚か…少なくとも
も…射程はかなり広いな、
相手を目視で確認できたな
ら発動可能と推論する」

ツヴァイ

「だったら発動前に倒す!!」

答えは聞かねえから!!

変態野郎!!!!!!」

クネ〜クネ

うねうね

グニユン〜…ぷるりん

変則的な動きに翻弄されて
攻撃は躲され、当たっても
餅みたいな身体に弾かれる

ツヴァイ

「ーテメエ!？」

じっとしてろ!!」

ドーパント

「嫌だね〜」

ビレろろ〜ン

ベーツと顔を伸ばして跳び
跳ねるドーパント

ツヴァイ

「オーライ…よく、

分かった!!千夏―

ハーフチェンジだ!!」

このメモリを?嫌々な

予感がするぞ!!!!!!

《SPIRAL》

《IGNITION》

《SPIRAL IGNITION》

左側がメタリックブラック

右側がマーブルカラーへと

変わり更にIGNITIONメモリ

を再度ドライバーに差し込

んで、しゃがみ込んだ

《IGNITION》

MAXIMUM

DRIVE》

ドーパント

「な”何をする気だ!?”」

ツヴァイ・（千夏）

「イグニッション!!!!!!」

インフェルノ!!!!!!」

ヒュッバァーカッ

右半身から路地裏全方位に
棘が伸びていき一本が雪に
触れー爆発!!!!!!連鎖反応で
全ての棘が大爆発した

冬馬

「ふう、さすがに相性
最悪だな―ケホ、」

瓦礫の壁に背中を預けると
ハットに付いた煤をはたき
取る冬馬と―探偵事務所
で伸びてる千夏ちゃん

千夏

「冬馬…
起こしてくれ、」

冬馬

「ああ、すぐ行く!!」

藤岡さんと合流して帰路に
着いた俺だったが未だ雪都
は泣いていた…奴は身の危
険を感じて逃げたらしい…

奴のメモリは分からないが
俺達には対応策があるのさ

テメエが笑ってられるのも

今だけさ!!!!!!

第五話 Dな奴／彼はお怒り！！（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Dな奴／彼は容赦なし

第六話 Dな奴／彼は容赦なし（前書き）

作者です、漸く本格始動？
開始なツヴァイで〜す

第六話 Dな奴／彼は容赦なし

仮面ライダーツヴァイ

「本日未明、雪都学園の生徒18名が校舎屋上から飛び降りるという事件が起きました…警察は集団自殺と見て捜査している模様です尚…飛び降りた生徒の友人の証言では彼らは皆、最近話題の楽園に行ったと親しい友人達に話してい…」

ブチッ

徐にテレビをリモコンで切った冬馬はハットを脱いでくしゃくしゃと頭を搔く…

千夏

「言っまでもないが、例のドーパントだな」

タコ抜きタコ焼きを頬張り
ながら冷静に語る千夏

因みにタコの処理は冬馬だ

冬馬

「くそッあの時倒せてれば
こんな事には……」

悔しそうに机を叩く冬馬を
冷めた瞳で千夏は見つめる

千夏

「メモリブレイクしても
彼らは死ぬ運命だ…何故
なら樂園に行った事実は
消えないからな、」

冬馬

「本気で言ってるのか？」

ああ当然だと言った千夏の
胸倉を掴み上げる冬馬

千夏

「樂園と言つ幻想を忘れる
か―乗り越えなければ、
どのみち死は免れない」

私達の仕事はカウンセラー
か？違つだろ！！冬馬！！！！

冬馬

「あの嫌な奴は、
今―何処に居る？」

ストンと千夏を降ろした冬
馬はハットを目深に被つて
彼女に尋ねる

千夏

「それを調べるのが
冬馬の仕事だろう？」

一瞬きよとした冬馬は
口の端を吊り上げてCOOLに
笑つた…

雪都・ストロベリーポップ

女の子に人気で男性にも受けが良いスイーツ屋さんだ

「パク、ふうん大変ね？」

気怠くパフェを突つつき食べる目が開いてるか開いてないか判然としない綺麗な女子高生とキラキラと唇を口に運ぶ綺麗より可愛いが正しい同じく女子高生

「他人事ですね、

速水先輩は…」

速水

「だって〜ヒトミ、面白い話題じゃないしパフェ一つだし退屈だしね、」

ヒトミ

「折角冬馬さんが
奢ってくれてるのに…」

冬馬は…すいまして頭を
下げるヒトミに苦笑を返し
ハットを被り直す

冬馬

「コホンッ千夏の…
寝起きポラロイド、」

速水

「よしッ！何でも
聞きなさい！！」

冬馬がぼそつと呟くと目が
くわッと開き態度が180度
変わった速水先輩

ヒトミ

「（ビクッ）速水…先輩？」

そんな彼女を不安げに
見つめるヒトミちゃん

冬馬

「樂園の場所が知りたい、
それも死んだ生徒も
含めての場所を…」

速水

「樂園が複数存在するか、
又は移動するかね？」

冬馬

「オーライだ、速水！！」

ヒトミ

「うわー！？速水先輩の瞳を
こんなに長く見たのって
初めて…綺麗だな」

速水

「簡潔に言えば移動してる
噂を頼りに樂園を探した子
は見付けられなかったけど
全く別の場所ですべてた子
は行くことが出来た…」

妖艶な笑みを浮かべた速水
は更に続けて話す

速水

「そして楽園の移動には
法則性があると…
私は思っわけよ!!」

冬馬

「その法則性は!!!!!!」

ヒトミ

「うんうん!!」

身を乗り出して速水の次に
発声される言葉を一字一句
逃さまいと耳を研ぎ澄ます
冬馬ちゃんとヒトミちゃん!!

速水

「そこまでは解らないよ
てへ(o^_^)」

.....

保坂探偵事務所

千夏

「検索すべきは楽園！！
幻惑…移動…冬馬、
次の鍵を頼む！！」

冬馬

「雪都公園、雪都港、
スターホール…それから
チューニングベル…」

星のライブラリーに入った
千夏に楽園が存在した場所
を次々に口で羅列する冬馬

千夏

「ふう検索完了…さてと、
行こうか？相棒！！」

冬馬

「いや千夏は待機だ、

恐らくアレを…

使っからな！！」

そう言つて事務所を飛び出した冬馬を見送つて千夏は奥の扉を開け中へと消える

雪都・ハイウェイ

《SPIRAL》

《MAYBE》

《SPIRAL MAYBE》

愛車を運転しながら変身し

速度を上げていくツヴァイ

『南夏奈のバカ野郎は〜
フエイバリット!!!!!!
始まッるよ〜!!!!!!』

『さあ、いきなり!!
デビューシングルが…
雪都で大大ヒット?!?!?
来週、ゲストで登場!!』

『アイドルのT R a i n S t a rで
「私だけの仮面ライダー」
聴いてくださ〜い!!!!!!』

雪都・喫茶ブラン&ネーロ

客と従業員の全員が机や床
に寝そべり夢の中

カランカラン

来店を知らせるベルが鳴り
響いて唯一その場で平然と
していた男が振り返る

「さあ、おねんねの時間だ
ドーパント！！！！！！」

振り返った男の腹に巨大な
棘が刺さりそのまま外へと
放り投げられ地面を転がる

ツヴァイ

「悪いな？懺悔を
聞いてやる時間は無い」

「おのれ、ツヴァイ！！！！」

《D A Z Z L E》

左手の甲にメモリを差し込みダズルドーパントに変身

ダズル

「クックク、おまえの

望みはあの男だーろ！？！？

ツヴァイの右手から伸びた
巨大な棘を剣の様に扱って
ダズルを切り付けていく！！

ダズル

「やめろ！？ーぐあ！！！！」

ツヴァイ

「悪い千夏、

アレは必要ない！！」

ツヴァイ（千夏）

「わかった、」

ドライバーを引き戻して
両メモリを引き抜き別の

メモリを起動！！

《RAIDER》

《IGNITION》

《RAIDER IGNITION》

右半身がダークブルーへと
変わり右半身がメタリック
ブラックに変わる

ダズル

「夢の中で死ねええ……—
！？何処に消えた？」

幻惑攻撃を仕掛けようとし
たが目の前から姿を消した

ツヴァイを探すダズルの体
が弾ける

ダズル

「!? ああ”――

…なんゴバア――

次々と身体が爆発し身動き
が取れないダズルを遠く離
れた場所からツヴァイの右
目だけが奴を捉えていた…
手にライフルを持って

ツヴァイ・（千夏）

「さてと、

メモリブレイクだ!!」

《IGNITION

MAXIMUM

DRIVE》

ツヴァイ・（千夏）

「イグニッション！！」

「イレイズ……」

IGNITIONメモリをドライバ

ーに再度差し込み上空に向け
ライフルの引き金を引く

右目にはダズルが闇に飲み
込まれる姿が映っていた――

保坂探偵事務所

千夏

「ふむ、箸…焼き？」

「お好み焼きみたいだ、」

無事にドーパントを倒した
千夏はお好み焼きについて
検索中…冬馬は藤岡さんに
連絡を済ませて報告書相手
に睨めっこ中

今日も雪都に雪が

優しく積もり

キラキラと輝いていた

第六話 Dな奴／彼は容赦なし（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Iな彼女達

/

彼女は興味津々！？

第七話 Iな彼女達／彼女は興味津々！？（前書き）

これまでの仮面ライダーツヴァイは

樂園を見せて人を無気力に変えて自殺にまで追い込んでいたD A Z
Z L E ドーパントを

R A I D E R メモリのM A X I M U M D R I V E でツヴァイは虚
空の闇に飲み込ませた

第七話 I な彼女達／彼女は興味津々！？

仮面ライダーツヴァイ

『雪都名物！雪都ドラ焼き
私、雪にゃんも大好き
80円で絶賛発売中にや
食べてにゃんにゃん
』

パクッーむぐむぐ

『雪にゃんシリーズ第一期
ブルーレイで登場にゃん
未公開シーンが盛り沢山
絶対観てにゃん
』

はむ モグモグ

『雪にゃんに会える！？
スターホールに 月○日
雪にゃんショー開催決定
待ってるにゃんよ
』

冬馬

「あッ千夏、ドラ焼き
取ってくれる?」

千夏

「はむはむーほら!」

良く言えばアンティークの
備え付けラジオの前で仲良
く炬燵に入り雪都ドラ焼き
を頬張る冬馬と千夏ちゃん

千夏

「そろそろ時間だな」

ピツとラジオの録音を始め
る千夏といそいそとうちわ
を二つ用意して一つを千夏
に渡す冬馬くん

『南夏奈のバカ野郎は…
絶対ッ可憐ッ!!!!!!
始ッまるよ〜〜うツと』

千夏・冬馬

「ワクワク ドキドキ」

『さぁイキナリですが登場

して貰いますーて私の目の
前に居ますけどアイドルの
T R a i n S t a r の皆さんです！……！
拍手ーぱちぱちー
』

千夏・冬馬

「わぁーぱちぱちー！」

『き今日も良い雪〃奏です
蓬でーす えと飛鳥です
私は…プルプルプルー』

『ーと電話ですね！ガチャ
はい夏奈だよ ……………
あれ？もしもしー！ー！
夏奈ちゃんが大好きな娘
を永遠に夏奈ちゃんの傍
に記憶に残してあげるよ
喜んでね！夏奈ちゃん
』

『えっと…それはー！？
嘘でしょ？……そんな！？
消えた！ーなーちゃんが
嫌ア…なんでなん！？ー！
』

『俗に言う鬼隠しですか？
どないしょ！？奏ちゃんー！
わ私に言われても困る
』

ラジオを聴いていた二人は
顔を見合わせて外に飛び出
してフェンリル／スノーの
エンジンを点火！！チュー
ニング ポップへと向かう

二人が駆け付けると野次馬
やマスコミが群がっていて
その中心に南夏奈が今にも
泣き出しそうな顔でT R a i n
S t a rメンバーに向けられる
マイクや心ない質問をどう
にかしようとしていたが矛
先が移って彼女の責任問題
にいつの間にか変わりつい
に彼女の瞳から大粒の雫が
頬を撫でて落ちる

冬馬

「はいはい皆さん失礼、
邪魔だよ邪魔ー！！」

千夏

「（取り敢えず中に入り

ましよう夏奈さん」

夏奈達に野次馬を掻き分け
辿り着いた二人は彼女達を
チューニング ポップのビ
ルの中へ素早く入れドアを
施錠してバカ野郎な野次馬
達に手を振り小馬鹿にした
笑みを振り撒いてから夏奈
とT R a i n S t a r に向き直って

冬馬

「雪都で探偵業をしています
南冬馬です、それと―」

千夏

「相棒の保坂千夏だ！
よろしくな」

ササツと名刺を四人に渡し
た冬馬くん…夏奈達はまじ
まじと小学生みたいな二人
と名刺を交互に見てを繰り返
返している

夏奈

「保坂？…聴いた記憶が」

冬馬

「当然です！雪都いや、
世界一の名探偵ですから
あの人は””」

えっへんと胸を張る冬馬に
愛想笑いを返しながら夏奈
は千夏を目の端で捉えなが
ら考え込む

夏奈

「(まさか！？―
考え過ぎか？)」

当の千夏は大大ファンの彼
女達を間近に見て更に握手
して貰いご満悦である

千夏

「この右手…今日だけは
洗わないぞ！！！！！！」

奏

「洗おう…気持ちちは
理解するけどね」

飛鳥

「可愛いな」はい
幸せになるアメちゃん
千夏ちゃんにあげる」

千夏

「わわ！？ありがとう」

蓬

「俗に言う、
萌えですね」

偉く気に入られた千夏

「あれ？

冬馬に千夏ちゃん！？」

二人が振り返ると乱れた服
を直しながら驚きつつも眩
しくて爽やかな微笑みで近
付く藤岡にクラツと額に手
を当てて頭の中で蹠踉めく
冬馬さんと千夏ちゃん

「藤岡くん、
知り合いなの？」

藤岡

「ああリコさんが会うのは初めてだったね、」

少し吊り眼の黒髪ロングの女性に小声で二人について教える藤岡に冬馬と千夏はリコと呼ばれた女性警官を不機嫌そうに睨む

リコ

「？（なんか睨まれてる！？
凄く怖いよ藤岡くん）」

藤岡

「今回の放送分のデータはどこですか？」

リコが腕を掴み掛けた瞬間に藤岡は一步前に出て夏奈に尋ねる

夏奈

「えとスタジオに……」

藤岡

「行きましょう、」

冬馬と千夏も来なよ」

リコ

「ちよっ！？良いんですか？

探偵でも一般人ですよ」

藤岡

「大丈夫だよリコさん」

爽やかな微笑みが彼女の思考回路を麻痺させバク力と小さな舌を出していた冬馬と千夏にも気付かずに彼の三步後ろを付いていくリコ

蓬

「チーリーですね」

奏

「そうかな？」

飛鳥

「なんの話や？」

飛鳥も恋の勉強をしようね

飛鳥

「うち、頑張る!!」

第七話 Iな彼女達/彼女は興味津々!?(後書き)

次回仮面ライダーツヴァイ

Iな彼女達

/

不穏な雪

第八話 I な彼女達 / 不穏な雪（前書き）

これまでの

仮面ライダー ツヴァイ

ラジオ番組の放送中に突然
消えたアイドルの羽田七美

冬馬と千夏が駆け付け藤岡
と一緒に録音された今回の
放送分を聴くことに

第八話 I な彼女達 / 不穏な雪

仮面ライダー ツヴァイ

……—」

スタジオ内で録音した放送を聞き終えた藤岡は冬馬と千夏に顔を向けて口を開く

藤岡

「恐らく犯人はアレだろう
ただ…マジック等で閉鎖されたスタジオ内の人を約10
?しか離れていない人達に
気付かれずに消すことが…
可能か調べてくれるかな?
千夏ちゃん」

楽勝だ!!と言って星のライブラリーにダイブした千夏の周りの本棚が次々に移動して静かに彼女の前にスライドしてきた棚から適当に一冊を取り出すと速読して

直ぐさま隣の本を読み出す

千夏

「暫く待ってくれ」

リコ

「あれ何ですか？」

怪訝そうに藤岡の耳元に小声で尋ねたリコに彼は

藤岡

「千夏ちゃんは人間図書館なんだよ」

リコ

「はあ……？」

冬馬

「ふむ…犯人に覚えは？」

夏奈

「ないよ、全く！
いい迷惑だよ!!」

リコ

「ちよつと！？勝手に
仕事しないでよ！！」

勝手に事情聴取を始めた冬馬に怒鳴るリコをしっしつと手で邪魔するなの合図を出した彼女にリコは顔を真っ赤にして藤岡に助けを求めたが冬馬と一緒にいつの間にか彼も夏奈達に質問をしていて怒りを咄嗟に抑えて椅子に腰を落とす

リコ

「（私の知らない藤岡くん
なんかシヨックだな）」

千夏

「検索完了！！——不可能だ
出来るマジシャンは勿論
存在するが…今は国外に
居る彼等には不可能だ」

疲れたとスタジオ内の菓子
を勝手に開けて頬張る千夏

冬馬

「やっぱ、アレか」

藤岡

「削除タイプかな？」

千夏

「いや削除のメモリなら近くに居なければ不可能…
別タイプのメモリだ」

リコ達

「（ポカーン）」

全く理解不能な話をする三人にリコ達は置いてきぼり

夏奈

「（まさか二人が
ツヴァイなのか？）」

夏奈は夏奈で冬馬と千夏を
悟られないように注意深く

見詰める

冬馬

「夏奈さん―何か
思い出しましたか？」

視線に気付いた冬馬が見透
かしたように夏奈の瞳の中
を覗き込む

夏奈

「い、いいえ！？…何も」

プルル…プルルル…プルル

スタジオ内の電話が
不気味に鳴り響いた

藤岡

「―この電話番号は
皆が知ってますか？」

受話器を押さえてふと思い
出したように夏奈に尋ねる

夏奈

「スタッフなら知ってます

後は関係者で…リスナー
さんは全然知りません」

藤岡

「ふうん…そうだよね」

リコ

「T R a i n S t a r の皆さんを
警護した方が……」

千夏

「そんなの皆が解ってる」

至極冷徹なツッコミにうぐ
と再び椅子に頂垂れるリコ

リコ

「ーじゃあー！」

早く電話に！！」

藤岡

「いや出ないよ」

奏

「で出ないんですか！？」

飛鳥

「漸く喋るねん…」

蓬

「俗に言う、

焦らしですね？」

基本だろう、とリコに追い
撃ちを与える冬馬くん

リコ

「なんか酷いよー!!」

10分後―再度電話が鳴り
響き夏奈が深呼吸してから
受話器を取る

夏奈

「もしもし」

犯人さん？」

『やあ、忙しいのかな？
次は飛鳥ちゃんだよー!!』

飛鳥

「うちなん!？」

慌てて傍にいたリコの
腕に抱き着く飛鳥

《RAIDER》

RAIDERメモリをデジカメに
差し込み飛鳥に向ける冬馬

一瞬で飛鳥はスタジオから
掻き消えて奏は顔を伏せる
デジカメのディスプレイを
覗き込んでいた千夏は

千夏

「珍しいメモリだな」

冬馬

「場所が解った、
行ってきますー!!」

藤岡

「気をつけてねー!!」

リコ

「え？へ？本当に
名探偵だったの！？」

て言うか行かせて良かった
んですか？危険ですよ！！

藤岡

「この『事件』に関しては
彼女達がプロだよ！！」

リコ

「そうなんですか――
あれ彼女達って？」

リコちゃん――冬馬は女の子
警察官なら解ろうよ

夏奈

「犯人さん、残念です
……さようなら」

『なに？――どうガチャ……』

受話器を戻した夏奈は

夏奈

「(RAIDERメモリ…二人が
やっぱりツヴァイか)」

先程貰った名刺を見ながら
残念そうにクシャと握り潰
してゴミ箱へと放り投げる

蓬

「カナカナさん
大丈夫ですよ」

大切な二人が消えてしまい
泣きじゃくる奏の背中を撫
でながら励ます蓬だが

奏

「蓬ちゃん…
カナカナ言っな!!」

ドゲシ

蓬

「痛いですよ」

チューニング
ベル
隣の広場

「オツリヤアアアアア」

ドゴツオオオ

「ンビヤラバ！?!？」

ケータイを見詰めていた男
の背中を全力疾走×跳躍＋
なんか封印的な力で植木に
蹴り飛ばした冬馬くん

千夏

「はぁはぁ…待ってくれ
ふう、ケホー冬馬ぁ」

フラフラと冬馬の肩に手を
置いて息を整える千夏

冬馬

「だらしない…
いくぞ千夏!!」

《MAYBE》

千夏

「お、オーライ…相棒」

《IF》

ドライバーにメモリを挿入
吹き荒ぶ白銀の風が二人を
包んで晴れるとバックルを
一対に合わせたツヴァイが
悠然と彼へと近付く

「やはり…現れたか
変身!!!!!!」

《I×Z》

身体に付いた草等を落としながらズボンの裾を上げてメモリを脛に差し込んだ彼はアイズドーパントに変身

ツヴァイ

「気持ち悪ッ妖怪の
百目みたいだな…」

だるんと垂れた皮膚に大きな目が体中に付いた最悪な見た目のアイズドーパント

アイズ

「フハハ！！恐れ入った
―かベルヤア！？！？」

全身急所のアイズに軽めにツヴァイはパンチを見舞うとアイズは地面を奇声を上げながらゴロゴロ転がる

ツヴァイ（千夏）

「とんだバカ野郎だな」

ツヴァイ

「サクツと終らせるか」

アイズ

「ちよつとタンマだ!？」

慌てて起き上がったアイズは両手を前に出してメモリブレイクを止めさせる

ツヴァイ

「時間稼ぎか？」

アイズ

「違う…俺を倒せば七美と飛鳥は無事では済まないそれでも倒すのか？」

『ほう奴の話は本当だな』

ツヴァイ

「マジか!？どうすれば…
とか思つかバカ野郎!!」

《RAIDER》《IGNITION》

《RAIDER IGNITION》

RAIDERとIGNITIONメモリで
ハーフチェンジ！ライフル
のレイダースナイプを構え
引き金をカチカチッと引く

アイス

「？何も起きーアギヤア！？」

僅かなタイムラグでアイス
の身体が弾ける

アイス

「狡いぞ！？反則だろ！！」

ツヴァイ

「デメエはどうなんだ？」

沢山の目がウインクすると
レイダースナイプがアイス
の手に収まる

ツヴァイ

「あれ？そつちも狡い！？」

アイズ

「フハハッ複合メモリを
舐めるなよ！！！！！！」

カチカチカチと連続で引き
金を引きタイムラグで身体
が爆ぜる——アイズ

アイズ

「ウイギエツ！？！？
痛い痛いいいいい」

余りの痛みにガクガク
震え出すアイズ

ツヴァイ

「ソレとレイダーの眼は
連動してるからな」

《RAIDER MAXIMUM DRIVE》

アイズが手放したスナイプ
をガシヤンと開いてRAIDER

メモリを差し込んで銃口を
アイスへ向ける

ツヴァイ・（千夏）

「レイダー…
ショットイレイズ!!」

黒銀の弾丸がアイス体内の
I×Zメモリを射貫く

アイス

「ア”…ヴァかな!?”――

人間に戻り芝生の上で気を
失った男の傍らですやすや
寝息を立てる七美と飛鳥の
頬をぺちぺち叩いて起こし

ツヴァイ

「お嬢様方…お友達が
心配しておられますよ」

飛鳥

「あッほ本物の!?”
ヒーローさんや!!」

七美

「……………」

飛鳥あ！！なーちゃん！！

あれが…ドーパントですか

藤岡達が遅れて駆け付けて
奏は二人を抱き締めリコは
バ力面で気絶した男に手錠
を掛けてホッと溜息を吐く

藤岡

「お疲れ様だね」

千夏

「藤岡は複合メモリを
知ってるか？」

藤岡

「いや初耳だよ
星の検索は？」

千夏

「該当の本が無い…」

冬馬

「未完成だから
製本化されてないとか」

藤岡

「有り得るね」

謎の複合メモリは星のライ
ブラリーでさえ検索が出来
ないただの未完成品ならば
良いけど……愛する雪都を
悲しませる物に変わらない

保坂さん……貴方なら

よそう考えるのは

今日はやけに――雪が冷たい

第八話 Iな彼女達／不穏な雪（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Sな落としもの

/

帰ってきたD

第九話 Sな落としもの／帰ってきたD（前書き）

これまでの

仮面ライダーツヴァイ

I×Zと言う複合メモリを
使って七美と飛鳥を消した
アイズドーパントを見事に
倒した二人だが冬馬の心は
晴れない

第九話 Sな落としもの／帰ってきたD

ミラクル キュート

雪にゃん

雪乃ネナ

「出たなシタイナー!!」

シタイナー

「シタイナーアア!!!!」

ビュッ ドカン

ケトル

「ねネナちゃん、

雪にゃんに変身よ!!」

タッチ キュート

ミララポ プハート

雪にゃん

「愛と奇跡の女の子!!

キュートに決める!!

雪にゃん!参上にゃん」

シタイナー

「グルル……」

キミトシタイナアア」

ビガーン

ケトル

「街灯と合体した！？！？」

雪にゃん

「ケトちゃん、

力を貸して！！」

雪にゃん

「クルミラクルミラ……」

キュートチャージ！！」

雪にゃん

「これで決めキメ！！！！」

シタイナー

「ガアア……シタイナー」

雪にゃん

「煌めけキュートに！！
クルミラバスター！！」

シタイナー

「ギャアア……ボカン

ケトル

「ヤッター！！」

雪にゃん

「帰ろ ケトちゃん」

次回予告

ミラクル キュート

雪にゃん

「私が雪にゃんだよ」

「雪にゃんが二人！？」

『絶体絶命 現れた
黒い雪にゃん』

「次回もキュートに
決めキメにゃん」

「やはり雪にゃん
第二期シリーズは
演出が最高だな！！」

「ファーストの問題点も
見事にクリアしている」

仮面ライダーツヴァイ

保坂探偵事務所

炬燵でミカンを食べながら
録画してた『雪にゃん』を
千夏ちゃんは観賞中

時刻は午前3時…いつもは
ぐっすり寝ている時間だが
何故か寝付けず眠くなるま

でとビデオを観ている訳だ

ガタガタ、ビュオォー

千夏

「風が強いな、今朝から

冬馬は…たく心配だ…

早く帰ってこい!!」

窓から外を見つめる千夏は
一日中依頼で出掛けている
冬馬を心配して寝付けない
のだが自覚がない

千夏

「一人は嫌いだ…」

ギュツと熊のぬいぐるみを
抱きしめて炬燵の中に潜る

しんしんと雪を降らせる空
に灰色のカーテンが現れて

小さな青白い光が事務所の
前に落ちていく

「おいおいマジかよ!？」

午前7時 事務所・前

冬馬が事務所に帰ってくる
と常に雪が降るこの雪都で
薄着も薄着で横たわる小さな
女の子を見て嫌な予感に
寒さとは関係なく体を震わ
せながら近付いていく

冬馬

「お、おい…生きてる？
生きててください!!」

「――…ウニユ?」

おお生きてたと胸を撫で下
ろしながらつんつんと頬を
突つついてみる

「りゅゝへ…クシユン」

冬馬

「寝てると風邪どころか
凍死しちゃうよ…」

「だいじょぶ、クシユン」

冬馬

「取り敢えず家に来て」

何度なくしゃみを可愛いく
する少女を連れて事務所の
鍵を開けて中へと入る

「——くん？…いい匂い」

むくりと炬燵から這い出て
辺りを見回す千夏の目の前
に美味しそうな朝食が並ぶ

千夏

「冬馬！？いつ料理の
腕を上げた？」

ハガル

「おはようございます
朝食が出来ましたので
千夏様も頂きましょう
あッ私はハガルです」

メイドいやメイド服を着た
それはそれは眩しいくらい
美人の女性がペコッとお辞
儀をして炬燵に入ってきた

千夏

「だ誰、冬馬!!」

冬馬

「事務所の外で
倒れてたのを拾った？」

はあ？なんで疑問形なんだ
メイドいやメイドあもう
面倒くさい!!メイドさん
が倒れてたんだ!!!!!!

ハガル

「お二人とも朝食が冷めて
しまいます!!召し上がれ
お話は後でお願いします

それでは頂きます」

あッはいと箸を取る二人

千夏

「く苦しい……」

冬馬

「右に同じく……」

朝食の美味しさに三回もお
かわりした二人は炬燵の上
にぐでんと体を投げ出して
食器を洗うハガルを眺める

千夏

「空から落ちたね……」

冬馬

「小さい娘の姿はソルで
ハガルは未来の可能性を
具現化した存在だって」

千夏

「羨ましいな」

冬馬

「例のカーテンを通って
別世界から来たらしい」

千夏

「興味深い!!」

バツと炬燵から立ち上がり
奥の部屋で灰色のカーテン
の検索を始めてしまう

冬馬

「仮面ライダーねえ」

『南夏奈のバカ野郎は』

百花繚乱!!!!!!
始まるよ~~~~うつと』

『雪都の不思議を追え!!』

その1!! 雪都を護る謎の
ヒーロー、仮面ライダー

実は私も助けられました
その2!! 灰色のカーテン
今日の明け方の空一面に
広がって怖かった!!』

『その3...の前に!!』

T R a i n S t a r のみんなで!!
私だけの仮面ライダー!!
聴いてくださーい
』

『 前は色々であつて
歌えなかったから今日は
楽しんで聴いてね!! 』

『 今日も明日も幸せや
』

『 お兄ちゃん!! 七美…
がんばるからね!! 』

『 俗に言う、妹キャラ
』

冬馬

「 仮面ライダーツヴァイ
なんか…良いじゃん
」

プルル…プルル…プルル…

ハガル

「 はい、保坂探偵事務所!
ご用件を伺います
」

冬馬が仮面ライダーと言う

呼び名を気に入っていると事務所の電話が鳴って既に専属メイドと化したハガルが応対の為に受話器を取る

『…………南冬馬は居るか?』

ハガル

「冬馬様に電話ですよ」

はーいと受話器を受け取る

冬馬

「電話、代わりましたよ」

『久しぶりだな…冬馬』

冬馬

「……………」

『千夏は元気か?』

『冬馬が雪都のヒーローか』

有り得な―ガチャ…

ハガル

「冬馬様？依頼では
なかったのですか」

首を傾げるハガルに冬馬は
出掛けてくると言い残して
事務所を飛び出していった

ハガル

「と冬馬様！？どちらに？」

ハガル（ソル）

「冬馬、どうしたの？」

ハガル

「私達には解りませんね」

ハガル（ソル）

「ユカは無事かな？」

ハガル

「心配ないですよ、

みんなが傍にいます」

第九話 Sな落としもの／帰ってきたD（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Sな落としもの

/

もう一つのT

第十話 Sな落としもの／もう一つのT（前書き）

これまでの

仮面ライダー ツヴァイ

空から落ちてきた不思議な
女の子ーソルと未来の可能
性の具現化であるハガルが
出た電話の相手の声を聞き
冬馬は事務所を飛び出した

第十話 Sな落しもの／もう一つのT

仮面ライダー ツヴァイ

あの人からの電話を信じられない私は思い出の場所に愛車で駆け付けた…雪都を見渡せる丘…今でも熱くて紅い手の感触を忘れることが出来ない私が聴いた幻聴だと信じたい自分と本当にあの人からの電話だと信じたい自分が私の心を掻き乱す…ぶんぶんと頭を振って雪都を見渡してみる

変わらない雪都だけは

俺が変えさせない

あの人と約束したから

「変わらないな…だが
直に変わってしまう」

《B I T E》

《A G I T O》

冬馬

「なんで…どうして
帰ってきたんですか？」

《M A Y B E》

《I F》

「冬馬は…いつまでも
変わらないな……」

《B I T E A G I T O》

層状に牙と顎が頭から足先
まで重なり合ったツヴァイ
と同じドライバーを付けた
異形の存在が冬馬を見詰め
一歩前に進む

『父さん！？…お父さん！？』

冬馬

「いくぞッ相棒！！」

『嫌だ！！戦えない！！』

冬馬

『うるさい、千夏…
変——身ッ！！！！』

《IF MAYBE》

変身と同時にあの人に拳を
叩き付けるが片手で止めら
れていて直ぐさま蹴りを繰
り出すがソレも止められる
舌打ちをしながら開いた手
を握り締めて殴る寸前で私
はあの子の掌打で呆気なく

10M程後方にぶつ飛ばされ
急いで立ち上がると一瞬で
移動したあの人に顎を蹴り
上げられ数秒の浮遊感の後
雪の上に落ちて変身が解け
て…千夏が私の目の前に気
を失った状態で現れる

冬馬

「くそ、千夏…」

「千夏も護れないのか」

霞む目で必死に千夏に手を
伸ばす…あの人が私と千夏
の間に立っている…邪魔だ

「変わらない者には…」

死が等しく与えられる」

貴方が初めて

褒めてくれた

私の長所です

変わらない…わけじゃない

変わらずに雪都をみんなを

貴方を

愛してるから

みんなの

帰る場所に

私が居るから

だから

私が変わったら

みんなが

迷子になるから

私は変わらないんです

「……らしいな」

最初の方の言葉が聞き取れ
なかった私は仰向けになる
足音が近付いてくる―私を

呼んでる……ソル？

ソル

「冬馬……ち千夏、
はぁハァーん」

『彼が二人を……ですが
今の私達では戦えない』

「異世界の住人か……
ソル・ヴァルキリー」

ソル

「よくも冬馬と千夏を……！」

「この世界の理では
戦えない筈だが」

ソル（ハガル）

「その通りです、
ここは……退きましょう」

ソル

「嫌だ……戦乙女が敵に
背を向けるなんて……！」

冬馬

「ありがとう…ソル
私がやらなくちゃ」

何とか立ち上がった私だが
正直勝てる気がしない

ソル

「ウィルドのルーンなら
使える筈ッ！！！！！！」

ソルが両手を前に翳す

青白い光が収束して

深紅のメモリが現れた

そしてメモリを私に渡すと
にっこりと微笑んでボタン
と雪の上に倒れる

「無理矢理に力を
使った代償だな」

本当にソル…ありがとうね

《TYR》

冬馬

「いくよー保坂さん!!」

第十話 Sな落としもの／もう一つのT（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Sな落としもの

／

Tとベルセルク

第十一話 Sな落としもの／Tとベルセルク（前書き）

これまでの仮面ライダーツヴァイは

電話の主は保坂だった、更に彼も変身して冬馬は窮地に立たされる
それを救うべく戦乙女、ソルが生み出したTYRメモリの力は！？

第十一話 Sな落としもの／Tとベルセルク

仮面ライダー ツヴァイ

《TYR》《RAIDER》

「貴方の懺悔を、わたし——俺が聞いてやる……！」

《RAIDER TYR》

猛火を具現化した左半身が彼女の悲しみを力に変える

《TYR MAXIMUM DRIVE》

左手の甲に装着された弓のハンドルライザーにTYRメモリを挿入して

右手で弓を引く様になると光の矢が顕現した

「逃げないんですか？」

「理が異なるが神の矢を躲す事は出来ない筈だ」

構えもせずに正面に立つ彼に矢の照準がぶれる

「……千夏は元気です、少し寂しがり屋だけど」

「そうか、冬馬は大丈夫か？」

「生活に困らない程度には依頼が来ますよ」

「そうか……終りにしよう」

猛火の如き矢が降り頻る雪を溶かす音とツヴァイの荒い息遣いが聴こえる

「ふう……テュール、射抜けッ」

覚悟を決めたツヴァイから細く鋭い焰が彼を目掛けて放たれ、そして貫いた

《A…G I T…O》

AGITOのメモリが猛火に焼ける……

「甘いな冬馬は」

「貴方が師匠ですけど」

メモリを1つ失い変身の解けた保坂は背を向けて歩きだす

「何処へ！？ 待ってください——ッ！！」

2人の間に黒い異形が降り立った

「ベルセルク、戦乙女同様に灰色のカーテンから雪都に落ちてきた物だ」

『haxaaaaa——gururu』

巨大な翼を折り畳み頭を下げると背中に保坂が飛び乗る

「ホールに気をつける」

そう言い残して雪空に保坂が消えた後、暫くハットに雪が積もるの

も忘れて

佇んでいた冬馬は我に返り千夏を抱き起こす

「帰るぞ千夏」

「ん、——お父さんは？」

「また会えるさ、雪が降る限りな」

目を擦りながら起きた千夏を立たせて今度はソルを起こしに掛かるが

「帰りましょう冬馬様」

ソルは何時の間にかハガルに姿を変えてフェンリル／スノーを運んで来てくれていた

「ハガルは歩いて帰るの？」

千夏にヘルメットを被せながら尋ねた冬馬にハガルは少し悩みながら口を開いた

「散歩がてらベルセルクの気配を探ってみますから先に帰って下さい」

「１人で大丈夫か？」

「コレでも戦乙女ですよ」

メイド服姿で言われてもなと思いながら冬馬は千夏を後ろに乗せて事務所に戻っていった

『厄介ですね、ソルは力を使えないのにベルセルクは使えるみたいですよ』

新雪を踏み鳴らしながら商店街のお店を1つ1つ見て回るハガルは
思案中

「見てアツコ!? メイドさんが居る!」

「え、本当だ!? ……綺麗」

「メイドさん!!!」

ハガルに駆け寄ったマキに「よ」止しなよ」と腕を引っ張るが如何せん非力なアツコでは止められない

「お姉さん本物なの?」

「何に對してでしょう?」

「だから迷惑だよ」と肩を揺するが、やはり如何せん非力なアツコでは止められない

「メイドさんでしょ？」

「マスターに仕える身として正装だと聞きましたので着ています」

マキとアツコは一緒に「へえ」と頷く

「失礼ですが今は何時ですか？」

「ん、6時すぎだよ」

マキの答えに慌てたハガルはスカートの両端を掴んでお辞儀をして足早に去っていった

「事件だね！」

「なにが？」

「冬馬さん家に行くよー！」

「キヤア！？ 落ち着いてよー！？！？」

マキに鞆を掴まれ引つ張られていくアツコの悲鳴が商店街の端から端まで駆け抜けた

第十一話 Sな落としもの／Tとベルセルク（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Kな依頼

/

気になってた続き？

第十二話 Kな依頼／気になってた続き？（前書き）

これまでの仮面ライダーツヴァイは

メモリを破壊する事で彼の変身を解かせた冬馬とベルセルクに頭を悩ませる

ハガル、メイドさんと出会って事務所に向かったマキとアツコの2人は

第十二話 Kな依頼／気になってた続き？

仮面ライダー ツヴァイ

「大変ッ大変！？ 大変だよー！？」

俺が冷えた体を心の底から暖めてくれる業火より熱く日食の様に黒いコーヒーを今まさに
口に付けようとソーサーから上げた時、金具が外れ掛けたドアをぶち開けてマキが慌てて
事務所に駆け込んだ……この時、間違いなく厄介な依頼が舞い込んだと確信し――

「ハアハアめ、メ……メイドが雪都にやって来たー！？！？」

危うくカップを落とし掛けた

「……メイド？ それだけを言いに来たのか？」

呆れながらハットを被り直して机のソーサーにカップを置いてもう一度マキを見ると
その後ろで膝に手を付いて苦しそうにしているアツコが目端に映った

「アツコ！？ ハガル、水をくれる」

「既に持ってきましたよ、アツコさん？ ゆっくり飲んで下さい」

「……あ、りが——ござ……ます」

ハガルからグラスを受け取り水を飲み始めたアツコの横でマキがハガルを指差して「メイド、メイドさんが何で!？」と騒いでいる

「ほら、コーヒー」

「あ？ うッ——ぶふう!？」

盛大にコーヒーを吹いたマキは「苦い苦いよ!？」と再び騒いでいる
うゝん、ハガルが淹れてくれたコーヒーでも苦い物は苦いのか

「何でメイドさんが居るの?」

苦くて喋れないマキに代わりアツコが質問してきた

「何でって、居候……じゃなくて住み込みメイド?」

「基本メイドは住み込みなんじゃ?」

確かに……ハガルとソルを説明するの難しいな

「行き倒れていた所を冬馬様に助けて頂き、暫くの間でも身の回りのお手伝いをお願いまして事務所に置いて頂かせて貰っています」

簡単に説明が出来た!?

「……ん、千夏ちゃんは？」

苦味から解放されたマキがハガルに服を拭いて貰いながら千夏の方を気にしてキツチンの方を見たりしている

「あ……と、奥で引き籠ってる」

俺の答えに驚いている2人

「何で？ 雪にゃんが始まる時間だよ!？」

「千夏ちゃん大好きなのに」

時刻は午後7時、雪都の子供達がテレビの前に齧り付く時間だ

ミラクル キュート

雪にゃん

雪乃ネナ

「いくよ、メルちゃん!!」

氷璃メル

「私達がダープホールを倒す!!」

タッチ キュート

ミララポ プハート

タッチ クール

ミララポ プハート

ケトル

「2人共ッシタイナーが!?!」

シタイナー

「シタイ——「消えろ、ジルマカ プラスタ」」

シタイナーは黒いクルミラ バスター強化版、ジルマカ プラスタ
ーで消し飛ぶ

雪にゃんN

「よし、ダープホールに突入するよ!!」

雪にゃんM

「待っていなさい、ダープマター!!!!」

ミラクル キュート

雪にゃん

次回予告

「氷璃メル、再び我に仕えよ!!」

「メルちゃん!? やめてええ!!!!!!」

「うう……死ね雪にゃん!!!!!!」

ジルマカ ブラストー!!!!!!

クルミラ ブラストー!!!!!!

『洗脳、引き裂かれた友情』

「グス、メルちゃんがメルちゃんがあ!?!?」

「大丈夫、きつとネナちゃんが救ってくれるよ」

抱き着いて泣きじゃくるマキの背中を摩るアツコを見ていると別の

泣き声が聴こえた

「なんか知らないけど次の話を早く観たいよ〜!? ふえ〜ん」

床を拭いた雑巾を持って泣いていたソルと

「お願いネナ、メルを——あッ」

奥の扉をちょこつとだけ開いてRAIDERメモリを挿入したデジカメで

放送を観ていた千夏も泣いていて俺と目が合い直ぐに引っ込んだ

「千夏〜出てこい!」

「は放せバカ野郎」

ひょついと捕まえた千夏をソファーに座らせるとマキとアツコも側に寄ってくる

「フッフッフ、これを買ってきて千夏」

「も、う暗いし嫌」

「私も一緒に行くから、ね」

駄々を捏ねる千夏を説得してくれるアツコに千夏は小さく頷いた

第十二話 Kな依頼／気になってた続き？（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Kな依頼

/

スパイスが欠かせない

第十三話 Kな依頼／スパイスが欠かせない（前書き）

仮面ライダー ツヴァイ

今回の依頼は

「フッフッフ、これを買ってきて千夏」

「も、う暗いし嫌」

「私も一緒に行くから、ね」

第十三話 Kな依頼／スパイスが欠かせない

仮面ライダーツヴァイ

「なんでチョコレート？」

「隠し味なんだって」

「それじゃなくてビターね」

スーパーにて千夏が手に取ったミルクチョコレートを棚に戻して力才分80%辺りをアツコは探す

「うう、おなか空いた」

「どれが良いのかな？」

メモを確認するがビターチョコとしか書かれていない

「あッ雪にゃんチョコ！」

「へえ、意外にビターも有るんだね」

雪にゃんMがパッケージのビターチョコレートを取って2人はレジに向かう

「いらっしゃいませ〜ッてアツコさんに千夏ちゃん!？」

「マコちゃんだよね？」

「マコちゃんだ!」

そこにはスーパーの制服を着たショートカットで可愛いヘアピンを付けたマコちゃんが!？

な、何で2人が!？ 今日断れば良かったよ!?!？

「や、やあ〃100円です」

「あゝ切れてる」

「ほら、100円」

サイフの小銭入れに小銭が無かったアツコに千夏が50円玉を2枚差し出した

「ありがとう千夏ちゃん、マコちゃん丁度ね？」

「丁度お預かりします、シール？ レシートは?。」

「シールで、レシートは要らない」

バツと手を突き出して千夏はレシートを持ったマコちゃんにNOを告げる

「雪にゃん好きだね、でもビターで良かったの?」

「隠し味に使うから」

「そうだ! マコちゃんも一緒に食べよう!」

「もう上がりかな?」

「えと、後1分だけど」

マコちゃんが時計を確かめると19:59

「今から冬馬さん家で夕食をご馳走になるんだけど、マコちゃんも一緒に食べない?」

「良いの!?」

「勿論だ!」

千夏の許可が下りて直ぐに裏に入って勤怠を入力して私服に着替えたマコちゃん

「因みに献立は？」

「カレーだよ」

「？……チヨコをカレーに入れるの！？」

マコちゃんの質問に2人も変な顔になり悩み始める

「ハガルに聞けば解るだろ？ たぶん」

「そうだね」

「ハガル？」

聞き慣れないワードに首を傾げたマコちゃんにアツコが今日の出来事を話していると事務所に到着

「帰ったぞ！」

「お邪魔します」

「おや？ マコちゃん！」

ニヤリと速水が笑う

「速水先輩、どうして事務所に？」

「メイドだよ、面白そうだから」

アツコは一体何処から情報が届くのだろうと考え始める前に速水先輩の隣に居たマキだと確信した

「そちらの方は？」

「……………あ、マコです」

マコちゃんがハガルに見惚れている間にカレーの出来上がり♪

「それでは、みなさん頂きます！」

みんなも冬馬の後に「いただきます」と合唱した

「ム！？ 美味しい」

クワツと開眼した速水

「美味しいね、アツコ」

「うん、チョコ1つで変わるものだね！？」

アツコが答える間に3口もマキは食べた

「チョコを入れますと味にコクと深みが出ます、ただ甘いチョコだと喧嘩しちゃいますね」

マコちゃんは話も聞かずにハガルの一挙一動を眺める

「いつまで『マコちゃん』は居るの？」

「な”何をマキさん！？」

「女の子じゃ近付けても傍には居れないよ？」

「バレたら嫌悪の眼差しを向けらるね」

両隣に座ったマキと速水に秘密を握られ冷や汗を掻くマコちゃん

「……………憐れだ」

「冬馬さ〜ん””」

マコちゃんは冬馬に泣き付いてマキと速水を恨めしげに睨む

「よしよし、カレーを食べろ」

「へ？　ちょま”——」

冬馬のスプーンでカレーを食べさせられるマコちゃんはキャパを越えて為すがまま

「しかし何でカレーなんだ？」

「千夏は好きだろ？」

マコちゃんと交互にカレーを食べる冬馬は千夏の疑問に答える

「好きだけど……」

「今朝、偶然にもハガルがカレーを作ったからで他意は無いぞ」

「それならいい」と嬉しそうに食べる千夏を見ながら冬馬は

思い出のカレーだからな、偶然でも千夏が喜んでくれて良かった

「ほら、ニンジンも食べる!!」

「うッ……嫌い」

「——お父さん」とキーワードを出すと千夏は渋々ニンジンを頬張った

第十三話 Kな依頼／スパイスが欠かせない（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Rな狙い

/

彼女Uを捜せ

第十四話 Rな狙い／彼女Uを捜せ（前書き）

これまでのツヴァイは

塞ぎ込み掛けていた千夏に一時でも幸福な時間をと開かれた内緒の
夕食会

千夏が見せた笑顔にほっとした冬馬だった

第十四話 Rな狙い／彼女Uを捜せ

仮面ライダー ツヴァイ

今日も今日とて平和な朝を迎える雪都、だが探偵に暇はあっても退屈は無い!!

「お、おはようございます””」

遠慮がちに金具が外れ掛かったドアを開けて入って来た今回の依頼人は……

「吉野ちゃん、ひとりで来たの？」

少し落胆しながらソファーの上に乗った邪魔なマキを退かし彼女が座れるスペースを確保

「その……依頼を頼みに来ました」

普段は何を考えてるか解らない吉野ちゃんが今は不安を隠せずに落ち着きが無い

「ユカが……ユカが居なくなっちゃったの””」

顔を伏せた吉野ちゃんから啜り泣く声が聴こえて体は震えていた

「吉野ちゃん……取り敢えず、みんなを退かそうか」

「——そうですね」

昨夜の夕食後、速水が持ってきていた高級ジュースが齎した喜劇は酷い有様で

みんなは寢息を立てていて無事なのは飲まなかった俺とハガルの2人のみ

「ハガル、手伝って！」

「畏まりました!!」

物の数分で普段より綺麗な事務所に早変わりした！？　ハガルさん……流石です！

「皆様を玄関に置いて良かったのですか？」

「平気平気！　それより紅茶を吉野ちゃんにね」

再び「畏まりました」とお辞儀してキッチンに向かったハガルをソファーから見送り、吉野ちゃんに向き直る

「で、ユカちゃんが居なくなっただって？　いつ頃？」

「昨日の夕食までは一緒に居たの、私がお風呂から出たら居なくて家中を捜したけど見付からなくて、うっく」

「ふむ、消失か」

若干苦しそうに熊のぬいぐるみを頭に乘せた千夏がフラフラと俺の隣に座る

「はい紅茶です」

気が利くハガルは3人分の紅茶をテーブルに置くとキッチンに下がっていった

「消失、時間的猶予から鑑みて…削除や消去も考えられるな」

「待てよ千夏、まだドーパントと決まってるじゃない」

「あのユカが吉野のに何も知らせずに消える訳が無い」

「人でも連れ去れるぞ!」

俺の異議に千夏は「誰かに侵入された形跡は?」と吉野に尋ねると、それは無いそうだ

「ユカも抵抗した筈なのに気付けなかった——」

だからこそ「ドーパントだ!!」と裏付けを取った千夏は得意げに胸を反らす

「多少強引だが、一理あるな」

紅茶に口を付けながらメモリを考えてみる——侵入していないなら削除と消去は有り得ない、なら秘密は？

移送？ 消失以外かもしれない、ただ除去なら生存は絶望的だ

「これ、少ないけど……足りなかったら言って下さい！ 今は親に頼む以外に

無いですけど——大きくなったら私が絶対に支払いますから!!」

テーブルに置かれた彼女の全財産、数万円は有るだろうが正直少なすぎる

「足りないな」

「ッッ——そうですよね」

悲しい……情けない……お金が無いだけで……大切な友達を救えない自分が……

「千夏、ユカを捜すぞ」

「ああ、検索しよう」

立ち上がった俺にハガルがお気に入りの白いコートを掛けてくれる

「頑張ってくださいね」

「必ず捜し出すさ」

「検索完了、一応ユカの行動範囲全てを捜そう」

「犯人から要求があるかもな、吉野は自宅で待機だ!」

「あの、え? お金が……捜してくれるの?」

当惑頻りの吉野の頭を軽く叩いて

「友達が頼ってきた! 断る道理は無いだろ!」

「あ、ありがとう……本当にありがとうございます！」

「わ！？ 抱き着くな！ 恥ずかしいだろうバカ野郎」

普段は人形のように落ち着いた吉野ちゃんが千夏の胸で泣いている

『——雪の結晶に決して同じ形が無いように、悲しみの次は幸せが舞い降りる、それが雪都だ』

今は俺達が幸せの使者になろう、雪都を護る仮面ライダーだからな

第十四話 Rな狙い/彼女Uを捜せ(後書き)

次回仮面ライダーツヴァイ

Rな狙い

/

Aは知っていた

第十五話 Rな狙い／Aは知っていた（前書き）

今回の依頼は

「ユカが……ユカが居なくなっちゃったの〃〃」

「千夏、ユカを捜すぞ」

「ああ、検索しよう」

第十五話 Rな狙い/Aは知っていた

仮面ライダー ツヴァイ

潮風と共に舞う波の花、絶え間無く降り続ける雪と合わさり幻想的な世界が広がっている。

「ユカ、何処かな？ 2日目のカレーがあるよって食べられないか？」

そうそう、ユカはカレーが食べられないのを忘れてた。雪都南側の海沿いに設けられた長く長い堤防は、愛車を流すのに打って付けで……いやいやユカを捜しに来たんだ！ 本当だぞ”

「しかし何も無い。此処には居ない——な？」

何やら足元に違和感……妙に暖かくて気持ち良い。

『ニヤア〜』

「アツコじゃん!？」

ひょっとと持ち上げて顔を合わせると円らかな瞳が細くなり、整った美人な顔立ちのアツコがゴロゴロと喉を鳴らした。

「なあ、ユカを知らないかな？」

アツコに聞くなよ……とは思っけど一応ね？ 動物の勘は当たるら

しいし。案の定『ニヤア?』と?マークが語尾に付いてる気がする……。

『にやつ!! ナア』

「えつと、こつち?」

俺の手から飛び降り、見事に猫着地を決めたアツコは、まるで付いて来いと言いたげに顔だけ向けて尻尾を、クイクイツと振りながら駆け出していく。

「ちよつと待つてつてば!」

急いでフェンリル/スノーに駆け寄った俺は、アツコを見失わないように必死に追い掛けていった。

一方その頃、千夏達は?

商店街のゴミ箱を開けて中を覗き込む銀髪の少女ソルと、ブツブツ考え事をしながら歩く千夏。

「いないねー?」

「ああ、さすがにゴミ箱の中には居ないと思うぞ」

「えっ!? マンガとかアニメで、よく見るシーンなの!?」

「それで見付かった話があったか?」

言われてみれば、そうだと納得したソルはゴミ箱の蓋を閉めて、千夏の横に並んでユカを捜し始めた。

「それにしてもツよく寝た〜!!!」

ん〜と伸びをしたソルの体から、ぽきぽきと骨が鳴る音が聞こえる。

「戦乙女に睡眠は不要と聞いたが？」

「この世界に中々慣れないんだよね〜」

「ハガルは平気なの？」

「私は力の制御がまだまだなんだ。無理矢理この世界の理を超える力を呼び出したから、その反動で力を大分取られちゃってね。前の世界でも人間と同じくらいの睡眠を取ってたよ」

「大変だな。今も辛いのか？」

「まあ、この世界が私達を拒絶してるのをビシバシと感じるよ」

あっけらかんと話すソルにもマスターと慕う大切な人が向こうの世界にいとハガル、そしてソル自身に聞いていた千夏は密かに出逢った日から検索をしていた。

「必ず……ソルを帰してあげるからな」

「ありがと。千夏も逢えるといいね！」

「今は此処に居るみたいだし、焦る必要は無いかな」

ふたりがユカ搜索に頭を切り替えた時、黒服が周りを取り囲み、ガイアメモリをふたりに見せ付ける。

《REGION》

「さあ……大人しく捕まれ」

「虫人間!？」

黒服達が思い思いの場所にメモリを差し入れ、蟻とも蜂とも取れるドーパントに変身してふたりに迫るが……。

「てえい!!」

1体のREGIONドーパントの股をソルが蹴り上げ、悶絶した隙を突いてふたりは駆け出した。

「に、逃がすな!! —— 追え!!!!!!」

雪都を知り尽くした千夏がREGION達を撒こうとするが子供と大人の体力、ましてや相手はドーパントであり、瞬く間に追い付かれてしまう。

「観念して、こちらに来い」

「っ誰が、ドーパントなんか……!!」

「そうよ! あんた達、私達みた……い、な子供を追い掛けて—— 変態じゃない!!!!!!」

息も絶え絶えながらも気力だけでふたりはドーパントに噛み付く。

「ガキはガキらしく大人の言うことを聞けばいい」

ふたりがぎゅっと目を閉じて、来たる痛みに堪えようと身構えるが一向にそれは来ない。

「ん……どうして？」

「ソル！！ あれだ！！」

REGIONドーパントは謎の小さな鮫型ロボットに襲われていた。

「なんでメモリガジェットが！？ ……とにかく変身を」

千夏がポケットを弄るがドライバーは出てこない。

「しまった！？ ……ドライバーは冬馬が。シングルにして持つておくべきだった」

「安全な所まで逃げよう？」

ガジェットにREGION達を任せてふたりは逃げ出した。

その頃、冬馬は？

黒猫アツコを追って狭い路地裏を進み屋根を登り、蜘蛛の巣を頭にくっ付けながらも冬馬は諦めずに、ただの猫……いやアツコを信じて前だけを見つめ——蜘蛛の巣が口に入り噎せた。

「ゲホ、ぺっぺ！？　まだ行くの？」

『なぐ。にゃーお？』

だらし無いな。それでも探偵か？と言われた気がした冬馬は文句の1つでも言おうと、アツコが飛び降りた先に這い出ると真つ逆さまに落ちた。……雪のクッションから立ち上がるとフェンス越しに雪都公園が見える。

「アツコ……ユカは此処に？」

アツコはフェンスに出来た穴を潜り抜けて公園の中に入り、冬馬は戸を開けて踏み入った。奥に進むと公園の真ん中にある大きな雪桜と木の前にツースайдテールの後ろ姿を確認した。

「やっと見付けた」

「探偵さん待ちくたびれちゃったよ。……変身」

《R》

彼女が振り返り、手に持ったメモリを起動させて腰に付けたドライバーに差し込み、西洋の騎士を彷彿させる赤紫のドーパントに変身。

「ドライバーに騎士の姿、ホールの幹部？」

「幹部候補……いずれは私がホールを統べる」

「ユカを見付けた。千夏、いくぞ！」

《MAYBE》

ドライバーを装着してメモリを起動させるが一向に千夏から返事がない。

「やはりツヴァイは探偵のふたりだったか。相棒は今頃、兵隊に捕まっている筈だよ」

「今回の依頼はホールの罠!? ——だが甘いな!」

《SPIRAL》

「ツヴァイは単体変身も可能だし、物理的距離の影響を受けずに、肉体ごと1つになれる!! 変身ッ」

《SPIRAL MAYBE》

ツヴァイに変身すると右目が直ぐさま点滅を始めた。

「冬馬? ソルを残して戦えない。任せるぞ」

冬馬が答える前に千夏の気配が消えてしまう。

「おい!? こっちは幹部候補が相手なんだけどー!」

『解決していた。加勢する』

再びツヴァイの右目が点滅して千夏の気配が戻ってきた。

『（あのガジェットがドーパントを退けていた……何故私達を助けた？）』

気を取り直してツヴァイはRドーパントに向き直る。

「『さあ、お前の懺悔を俺達が聞いてやる』」

第十五話 Rな狙い/Aは知っていた（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Rな狙い

/

Mは彼女達のヒーロー

第十六話 Rな狙い／Mは彼女達のヒーロー（前書き）

今回の事件は

「さあ……大人しく捕まれ」

《REGION》

「虫人間!？」

「っ誰が、ドーパントなんか……!!」

「探偵さん待ちくたびれちゃったよ。……変身」

《R——》

「今回の依頼はホールの罠!? ——だが甘いな!!」

「『さあ、お前の懺悔を俺達が聞いてやる』」

第十六話 Rな狙い/Mは彼女達のヒーロー

髪を振り乱しながら何かから逃げる男の開けた服から覗く鎖骨辺りにメモリの痣が見え隠れする。

「契約は——お守り頂きませんか、ね？」

《SPRING》

男がメモリの起動音声に降り頻る雪の奥に目を懲らすと、春香がシングル型のドライバーに『SPRING』のガイアメモリを差し入れ、若葉色に黄白のラインを走らせた騎士の姿に変わり、腰元に掛けたレイピアを抜き取ると男の首筋に切っ先を這わせた。

「少し遊んだだけで、こ殺すのか!？」

「この美しい雪都を穢す存在には死あるのみ」

《SPRING MAXIMUM DRIVE》

レイピアの鏢にある挿入口に『SPRING』のメモリを入れると惠風が吹き荒れ、レイピアに纏わせた風で切り付けると男は干からびて、液体窒素に浸けた薔薇の如くバリバリと音を立てて崩れ落ちていく。

「生を全うできたのです。有り難く思いなさい」

レイピアを一降りするとメモリを抜き、変身を解くと屋敷へと戻っていった。

仮面ライダーツヴァイ

此処は雪都一の豪邸、表札には南の文字。ずらりと整列したメイド達が代わる代わる見ただけで溜息が出そうな色鮮やかな食事を手際よく、若葉色の意匠が施された白いドレスを優雅に着こなした春香とブラックスーツを上品に着こなしたタケルの前に並べていく。

「タケルおじ様。全く夏奈には困ったものです」

「春香、夏奈だって頑張っているんだ。些か千秋を捜し出す事に夢中で選抜が甘くなっているようだけどね」

タケルと春香が囲むテーブルの上に、昼食と並んで幾つかのガイアメモリが置かれている。

「AUTUMNとWINTER。WINTERメモリの候補者が見付かったと夏奈が喜んでいたよ」

「確かRのメモリの？」

「そう、多少自信過剰の嫌いがあるが……」

「『春夏秋冬』の力に——耐えられるとは思えませんが」

鼻で笑った春香は昼食を終えるとナプキンで口を拭き、席を立つとタケルに一礼をしてから部屋を出ていった。

「星の『CONTRACT』は太陽の輝きが叶える」

南邸から雪都公園 雪桜の木の下、赤紫の騎士とツヴァイがサーベルと螺旋状の巨棘『スパイラルランサー』で斬り合っている。……僅かにツヴァイが押され気味で、遂に斬り飛ばされてしまう。

『おかしい、力ではこちらが上の筈だ。なのに打ち負ける！？』

「打ち負けてない！！ ただ攻撃が奴に通らない！ まるで空気の壁を相手にしてるみたいだ」

「最強のメモリの前にツヴァイも歯が立たないか？」

『（最強のメモリ？ 通らない攻撃。空気の壁。さつきは斬り飛ばさたのではなく、見えない何かに弾かれた？ ……そしてRの頭文字から導き出されるメモリの正体は！？）』

戦いながら『星のライブラリー』で検索をした千夏の目の前に1冊の本が棚からスクロールしてきた。

『検索完了——彼女のメモリは『REJECT』。私達は拒絶されている！』

「正解だよ！ だけどメモリが解つても君達ツヴァイに勝ち目は無い」

《REJECT MAXIMUM DRIVE》

サーベルの柄にある差込口にメモリを挿入。吹き飛ばされ膝を着い

たままのツヴァイにサーベルを振り上げる。

「——何だコイツは？」

REJECTドールパントとツヴァイの間に毛を逆立てたアツコが割って入り、牙を剥き出しにして睨み付けていた。そして飛び掛かったアツコをREJECTドールパントは開いた左手で地面に弾いた。

『アツコ！？　しっかり！』

抱き上げたアツコは痛々し気に喉をゴロゴロと鳴らす。小さな口から垂れる紅が白い地面を染め上げていく。

「ふざけんな！！　アツコはちっちゃな猫だぞ。ドールパントの力で……軽く叩いたとしても致命傷になるくらい分かるだろ？」

「高が猫で……頭は大丈夫か？　探偵さん」

優しくアツコを抱き抱えるツヴァイの背に『MAXIMUM DRIVE』状態のサーベルが向けられる。

「これで幹部入りだよ。少し簡単すぎだったか——な！？」

赤紫のエネルギー波はツヴァイの横を掠めていった。

「今度は鮫か？　REJECTの力が効かないだ！？」

千夏とソルをREGIONドールパントから助けた鮫型のメモリガジェットが、REJECTドールパントを雪の中を泳ぐ様にして巨大な牙と鰭で切り掛かる。痺れを切らしたREJECTドールパントの力

任せに振ったサーベルが腹に当たり火花を散らして地面をバウンドしていく。

「フー……玩具風情が私を虚仮にするな!!」

《MEGALODON》

鳴り響くメモリの起動音声。銀白世界に現れた者の腰にはツヴァイと同じドライバー。

《BITE》

右側の挿入口にBITEメモリを入れ、ガジェットの大きな背鰭を尾鰭側に倒し尾鰭を腹側から前に倒すと腹が開いて尾鰭を中に収納。半分の大きさになったガジェットの顎から前に突き出たガイアメモリをドライバーに差し込み、ガジェットの顔から上を横に向けてBITEメモリ側に押し倒してから両メモリを左右に開いた。

《BITE MEGALODON》

「雪の結晶に決して同じ形が無いように、悲しみの次は幸せが舞い降りる。それが雪都だ。——そして」

「今は俺が雪都を護る仮面のヒーローになろう。仮面ライダー……ガイストとして」

層状に牙と大顎が重なり合った姿。彼は名乗った……仮面ライダーだと。

「保坂さん!? どうして?」

『お父さん!!』

保坂、ガイストはツヴァイの肩を叩き、後は任せるとREJECTドーパントを見遣る。

「メモリの力を越える……ベルセルクと融合したのか？」

「愛するものを護る者として自身の犠牲は厭わない」

鋸状の刀身のツヴァイヘンダー『ガイストラーゼン』を片手で持ち、REJECTドーパントに一瞬で肉薄し斬り上げ斬り裂き斬り飛ばす。

「うぐ——変なメモリに！ 初期のメモリに！！ REJECTが負ける筈が!？」

「動くメモリを知らないのか？ それとメモリの力に頼り切る貴女に——俺は倒せない」

《BITE MAXIMUM DRIVE》

《REJECT MAXIMUM DRIVE》

ドライバーに挿入したBITEメモリを更に押し込み『MAXIMUM DRIVE』を発動。REJECTドーパントも再度メモリをサーベルに差し込み、両手で低く構え赤紫のエネルギー波を飛ばすが軽くガイストに躲かれた。

「バイトツ——シユタルクシユラーク!!」

牙の如き荒々しくも洗練された拳の一撃が胸を抉る。絶え間無く降る雪が道を開けて彼女は宙で止まった。裂ける音が響き、降り積もった雪によって世界と同化した針葉樹がREJECTドールパントと共に弾ける。

「手応えはあったが——逃げたか。メモリを残して」

変身を解いた保坂が砕け散った針葉樹の中から『REJECT』のメモリを拾うと、手の上で割れた。

「——お父さん!!」

保坂の背に千夏が飛び付いた。アツコを抱き上げた冬馬は雪桜に手を伸ばすと1匹の猫が冬馬にしがみついて震え始める。

「もう大丈夫だよ。ユカ」

『……………ナア』

弱々しくも安心させる為に鳴いたアツコを見て頭の毛を2つのリボンで結び、ツースайдテールみたいにした猫のユカは震えを止めて、アツコの顔をペロペロと舐める。

「暫く事務所に置いてもらおう」

「あの保坂さん、私……」

「仮面ライダーを名乗ったんだ。安心してくれ」

千夏が腕に抱き着いた状態で、冬馬にそう告げた保坂。目尻にきらりと光る雪の結晶を乗せて冬馬は暖かい胸に飛び込んだ。

第十六話 Rな狙い／Mは彼女達のヒーロー（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

丁な遊戯

／

季節外れのサンタクロース

第十七話 Tな遊戯／季節外れのサンタクロース（前書き）

これまでのツヴァイは

『検索完了——彼女のメモリは『REJECT』。私達は拒絶されている！』

「正解だよ！ だけどメモリが解つても君達ツヴァイに勝ち目は無い」

《REJECT MAXIMUM DRIVE》

「これで幹部入りだよ。少し簡単すぎだったか——な！？」

《MEGALODON》《BITE》

「雪の結晶に決して同じ形が無いように、悲しみの次は幸せが舞い降りる。それが雪都だ。——そして」

《BITE MEGALODON》

「今は俺が雪都を護る仮面のヒーローになろう。仮面ライダー……ガイストとして」

《BITE MAXIMUM DRIVE》

「暫く事務所に置いてもらおう」

「あの保坂さん、私……」

「仮面ライダーを名乗ったんだ。安心してくれ」

第十七話 Tな遊戯／季節外れのサンタクロース

仮面ライダー ツヴァイ

普段なら無数の資料やら何やらで足の踏み場を探さなければならぬ
保坂探偵事務所も最近ではガルのお陰で綺麗なものである。

【今回の事件は俺達がツヴァイと関係しているとみたホールが、仲
の良い吉野の飼い猫ユカを使って真偽を確かめる為に起こした事件
だったようだ。】

タイプライターに苦戦しながらレポートを書く冬馬。

【しかも俺と別れて搜索していた千夏をREGIONドールパントが
襲撃……俺の失態だ。更にソルまで巻き込んでしまう。だけど突然
現れた鯨型メモリ『MEGALODON』が2人の窮地を救う。】

保坂がガルのカレーに舌鼓を打ち、千夏が保坂の膝の上に座り、
にこにこしている。

【黒猫アツコの助けでユカを見付ける事ができた俺の前に、ホール
の幹部候補と言う女が立ち上がりREJECTドールパントに変身。
俺達もツヴァイに変身して応戦するが『REJECT』の力に苦戦
を余儀なくされる。そんな俺達の前に現れたのは……俺達のヒーロ
ー。】

「こんな可愛い娘の千夏ちゃんを置いて何処ほつつき歩いてたのよ
？」

「痛いぞ速水!？」

チヨップを受け抗議する保坂に速水のブローが決まった。

【そして保坂さんはわ——俺達の目の前で変%\$¥ \$!?!?】

「アアアア!?!? マキ何すんだよ!!」

「冬馬さんって保坂さんが好きなの? 藤岡さんが好きなの? どっち?」

タイプライターを無茶苦茶に打ち込まれて怒る冬馬はマキの質問に一瞬硬直。

「わた、俺は別に好きとかそんな……保坂さんは尊敬できる探偵の師匠で、藤岡さんは——て何だよその顔は?」

「冬馬さんて保坂さんと藤岡さんの前だと『俺』が『私』になるよ」

「へ? そんな事ないよ。たぶん」

小首を傾げる冬馬に呆れてマキはアツコを見遣る。

「——ん?(私!?) えとえと……二股はダメ——かな?」

「冬馬さん! アツコも二股はダメだって言ってるよ!」

「ええええ!?!? マキやめてよ!!」

告げ口するマキの口を顔を赤くしてアツコは塞ぎに掛かり、冬馬は更に『?』を浮かべた。

「成る程、2日目か……美味しいわけだ」

「2日目じゃなくてもハガルのカレーは美味しいぞ」

「保坂様に千夏ちゃん。褒めてもカレーしか出せませんよ」

「隠し味にチョコレートを使っているな？」

「はい。バレちゃいましたか……残念です」

すっかり仲良くなった保坂とハガル。因みにソルはハガルの中で睡眠中。

「千夏、何時まで保坂さんの膝の上に座ってんだ！」

「ここは私の席だぞ。バカ野郎」

「ずーいぞ」 私だって……その」

帰ってきてから保坂さんの膝に居座り続ける千夏を退かそうとする冬馬は、最後には声が小さくなり顔を赤くして俯いてしまう。

「（あれで自覚が無いから大変だよね？）」

「（子供の千夏の方が積極的だ）」

「（好意を隠さない分ね）」

マキと速水にアツコは勝手に冬馬と千夏の恋を分析。

「（……普通に攻めれば冬馬さんの圧勝なのに）」

「（千夏が異性として保坂と藤岡くんを意識し始めたら手遅れかも？）」

「（ハガルさんも意外な伏兵になったりして？）」

ひそひそ話をする3人と違い蚊帳の外のマコちゃんはユカと遊ぶ事にしたが、当のユカは吉野に抱き着いて離れずマコちゃんは仕方なくカレーをやけ食いするのだった。

「アツコは大丈夫か？」

「ひゃっ！？ 私は大丈夫ですよ」

「いやアツコじゃなくてアツコだ」

保坂にひそひそ話が聞こえたのかと心配するアツコだが、どうやら猫のアツコの事だと分かり胸を撫で下ろす。

「アツコなら熊田先生の所です」

「ああ……あの先生か」

冬馬の答えに保坂は何とも言えない顔をしてカレーを一口。

「腕は確かですよ？」

「そこは断言して欲しいものだ」

熊田先生はいい人なのだが保坂は何度も言い寄られ辟易している。
余談だが同様の被害を藤岡も受けている。

「お父様お父様」

「どうした千夏？」

「……（何時の様付けだ！）……」

「これからは……千夏と、ずっとずっと一緒に、居てくれますか？」

膝の上から見上げる形の千夏の瞳は不安で憂いを帯びていて、周りの皆も保坂を見詰めた。

「千夏が望むなら何時までも傍にいるよ」

そう答えた保坂の隣に立って千夏の肩に手を置く冬馬。

「わ、私も保坂さんが背中を預けられる人になるから。だから千夏、千夏には私も居るからね！」

「冬馬……ありがとう」

いよいよ千夏は目尻に溜めた涙を隠す様に、両手で押さえて俯いてしまう。

「ちょっと！ ふたり共々？」

「私達だって千夏ちゃんの友達だと思ってるけど！」

「そうです。寂しい思いはさせません」

マキと速水は勝手に完結する冬馬達に頬を膨らませ、アツコは優しく千夏の膝に手を添える。

「私と同じでユカも友達だよね？」

『にゃあ？』

「私達みたいにユカも、千夏ちゃんが好きかってこと」

『にゃっ！』

吉野は自分の胸に顔を埋めるユカに語りかけ、マコちゃんが補足すると元気よくユカは返事をした。

「ソルと私も友達に立候補してよろしいでしょうか？」

『なに言ってるのハガル？ 私達と千夏はもう親友よね！』

控え目に挙手したハガルを遮る様にソルが内から自慢気に声を張る。

「うんうん……ソル。それにみんな、——本当にありがとう」

千夏は何度も涙を拭きながら皆に感謝を伝えた。

『南 夏奈のバカ野郎は……オルタナティブ？ 始まるよー！！』
ラジオから聴こえてきた澁刺とした声。この御時世に人気のラジオ番組のパーソナリティ南 夏奈は今日も元氣の様である。

『雪都の不思議。夏奈にO S H I E T E』

『夏奈様夏奈様』 季節外れのサンタクロースを知ってますか？
——初耳ですよ！』

『おもちゃにお菓子が子供の居るお家に無料で届けられ、挿入されたカードに
【季節外れのサンタクロースより】と書かれているそうですよ。
私も欲しいな。

——いい人ですね！ あっサンタさんだから当然かな？』

『次は、真夜中の摩天楼に現れる巨大蝙蝠を見ちゃいました！？
怖くて明かりを消して寝れません。』

仮面ライダー助けてー！！ ——おお！？ 実は私、南 夏奈も仮面ライダーに助けられた事があります。
きつと仮面ライダーが退治してくれますよ！』

『蝙蝠ねえ……噂ならこの人、速水は何か知ってる？』

『蝙蝠はラジオと一緒にね。サンタは別の話を知ってる』

人差し指を立てた速水に皆が注目した。

『贈られた子の大切な物が消えるらしいよ』

「なにそれ？ 全然サンタじゃないじゃん！！」

「だけど欲しかった物が手に入る。だから大切な物が無くなっても、殆どの子は気にはしてもサンタクロースに感謝はすれど恨まない」

憤怒するマキをアツコが宥め、千夏はぎゅーと熊のぬいぐるみを抱きしめる。

「私は嫌だ。大切な思い出が詰まった物が消えるなんて」

「なーんか怪しいな。その季節外れのサンタクロースって奴」

「勘違いしないで欲しいのは、サンタクロースが大切な物を奪っているって決まった訳じゃない事」

「どちらにせよ、依頼が無ければ探偵は動かな——」

「じゃあ、そのサンタクロースを捜して！」

マキがアツコを吹き飛ばしバンザイの形で保坂の話を聞き終える前に依頼をお願いした。

「うう……マキは何も取られてないじゃない」

吹き飛ばされても怒らないアツコは女神の様である。ユカがビックリして吉野の指を噛んでしまったが吉野はただただ笑っている。

「だってプレゼントが欲しい！」

「そんな邪な心の子の所に、サンタクロースは来ないと思うよ」

「じゃあプレゼントを下さい」

「言い換えても意味は同じだよ、こゝこの——バカ野郎」

遠慮がちにアツコにバカ野郎と言われ、マキはショックを隠しきれない。

《ピンポン》

「ん？ お客さんだ。はい」

チャイムに答え、外れ掛かったドアを開けると目の前に堆く詰まれた箱が冬馬を飲み込んだ。

【お利口さんな千秋ちゃんへ
季節外れのサンタクロースより】

第十七話 Tな遊戯／季節外れのサンタクロース（後書き）

次回仮面ライダーツヴァイ

Tな遊戯

/

チェイス（仮）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2962j/>

仮面ライダーツヴァイ

2010年10月8日22時18分発行